

## 高貴寺蔵新出の梵文金剛般若經写本について (3)

奥 風 栄 弘

〔抄 録〕

高貴寺の『梵学津梁』の編纂は、慈雲尊者が亡くなられた後も数十年にわたり、弟子達が続けてきた。編纂は梵文の校訂作業という水準の高いもので、含まれている。単語の意味、綴りに関してはあらゆる経典や梵漢辞典などを参考に決定している。その編纂は宗門の枠を超えて、成し遂げられた。天台真盛宗や融通念仏宗の僧侶の協力もみられる。近代になってからは、『梵学津梁』に関する、『般若心経』『金剛般若経』『阿弥陀経』の3本は、特筆すべきものである。『般若心経』『金剛般若経』『阿弥陀経』は海を渡り、オックスフォード大学のマックス・ミュラー博士の許で、校訂出版された。完全な『阿弥陀経』は日本でしか、その梵本が発見されていない。今回はその中でも『金剛般若経』について述べてみたい。

**キーワード** 梵学津梁、慈雲、高貴寺、梵文金剛般若経、梵字

### はじめに

高貴寺（大阪府）の協力を得て、同寺に所蔵している梵文『金剛般若経』を調査できた。各々の写本の形態は『高野山大学院紀要』第10号（2008）<sup>(1)</sup>（「院紀要」と略）にて概略を発表した。その続きとして『印度學佛教學研究』第57巻第1号（2008）<sup>(2)</sup>（「印佛研」と略）に発表した。今回は未発表の写本の概略について述べてみたい。高貴寺でCDを作製するときに、写本の順番などを決定するに参照にした、総目録も検証してみた。新たに判ったことを本論文で述べてみたい。併せて試みとして梵文『金剛般若経』の第1章をローマナイズ対照し、簡単であるが意見を述べてみた。

### 1. 高貴寺所蔵の梵文金剛般若経について

高貴寺所蔵の金剛般若経は次のようになる。梵字はそのままで訂正せずローマ字化している。高貴寺の写真資料の4桁の番号を写本番号とする。例として（0028）と表示する。白抜きの番号の写本は、過去に雑誌等で発表しているものである。右端は拙稿で発表したときの略名であ

る (たとえば乾坤本など)。CD の仕分けでは①—④は本詮部にあり⑤—⑧は末詮部にあった<sup>(3)</sup>。

- |   |          |              |         |
|---|----------|--------------|---------|
| ① 金剛般若經 梵文 上                              | (0070)   |              |         |
| 金剛般若經 梵文 下                                | (0071)   |              |         |
| ② vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram     | (0072)   |              |         |
| ③ vajracchedikā prajñāpāramita sūtram     | 乾 (0073) | 乾坤本          | (乾) (坤) |
| vajracchedikā prajñāpāramita sūtram       | 坤 (0074) |              |         |
| ④ vajracchedikā sūtram                    | 甲 (0075) | 甲乙本          | (甲) (乙) |
| vajracchedikā sūtram                      | 乙 (0076) |              |         |
| ⑤ 梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 上                        | (0159)   | 初本           |         |
| 梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 下                          | (0160)   |              |         |
| ⑥ vajracchedaka prajñāpāramita sūtram 上 下 | (0162)   | 上下本 (合本している) | (上) (下) |
| ⑦ 梵文金剛般若經諸譯互證 一                           | (0165)   | 津本           | (津)     |
| 梵文金剛般若經諸譯互證 二                             | (0166)   |              |         |
| 梵文金剛般若經諸譯互證 三                             | (0167)   |              |         |
| ⑧ 梵文金剛般若經諸譯互證 四                           | (0168)   |              |         |

## 2. 総目録について

総目録は正式には、『高貴律寺所蔵 慈雲尊者遺芳 総目録 地』(0000) となっている。CD の中では、昭和5年(1930)に諦了師が編纂したとしている<sup>(4)</sup>。目録には「現存セルモノハ約五百卷ニシテ散逸セルモノ亦多カルベシ、且ツ全寺蔵中ニハ津梁目録ニ載セザルモノニシテ津梁中ニ入ルベキ性質ノモノ多数ナリ」と記されている。また、「部分不明ノモノ並ニ尊者滅後新ニ集メラレタルモノハ之ヲ雜録中ニ編入セリ」としている。先に書いた一覧を雜録通りに改めて書いてみると次のようになる。番号はそのまま使用し、題目を目録の題目と合わせてみた。

- |  |    |                 |           |
|--|----|-----------------|-----------|
| ① 金剛般若經 梵文 上下                            | 二冊 | 寫本              |           |
| ⑥ vajracchedaka prajñāpāramitā sūtram 上下 | 二冊 | 寫本              | 智幢和上加筆    |
| 梵文金剛般若經ナリ、横書シ對譯ヲ附ス                       |    |                 |           |
| ② 同本                                     | 一冊 | 但シ梵文ノミヲ豎書ス、對譯ナシ |           |
| ④ vajracchedakā sūtram 甲乙                | 二冊 | 寫本              | 智幢和上加筆    |
| 梵文金剛般若經ナリ、梵文横書シ諸譯對照ス                     |    |                 |           |
| ③ 同本                                     | 乾坤 | 二冊              | 寫本 智幢和上加筆 |
| ⑤ 梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 上下                      |    |                 | 智幢和上加筆    |

⑦⑧ 同本 四冊 寫本 智幢和上筆

上梓ノ稿本ナリ、但シ未ダ出版セラレズ

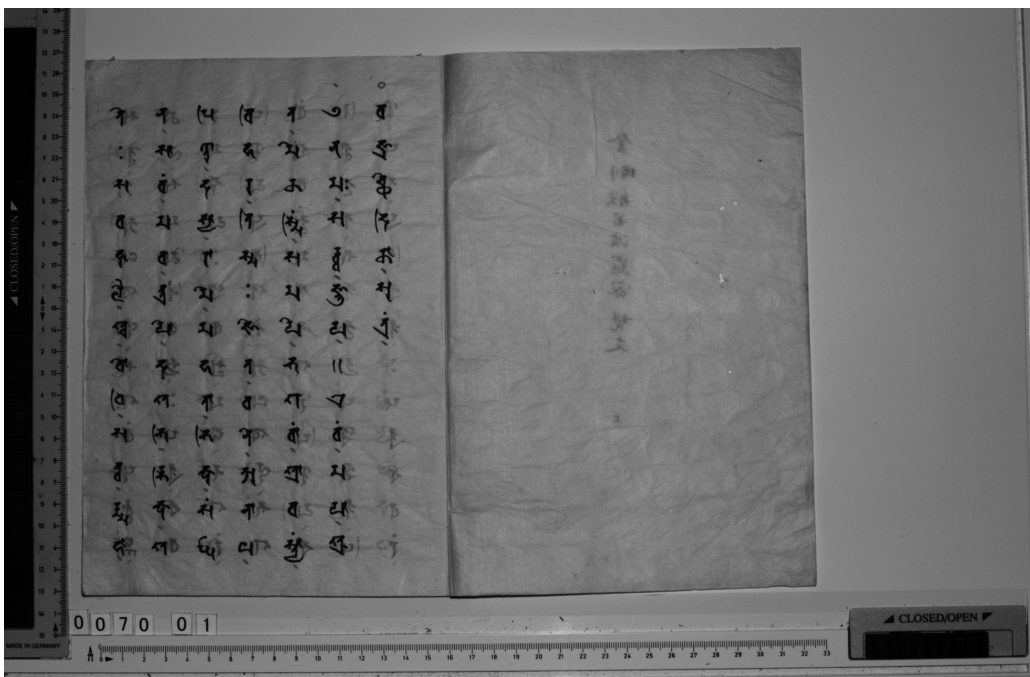
以上のようになる。⑦⑧「同本 四冊」については次の写本の概要で説明する。

### 3. 写本の概要について

(1)①金剛般若經 梵文 上 下 (0070) (0071) について

折り本形式で、表紙には『金剛般若經 梵文 上』『金剛般若經 梵文 下』と書かれている。各頁に7行に梵字のみが規則正しく縦書されている。 (資料 1)

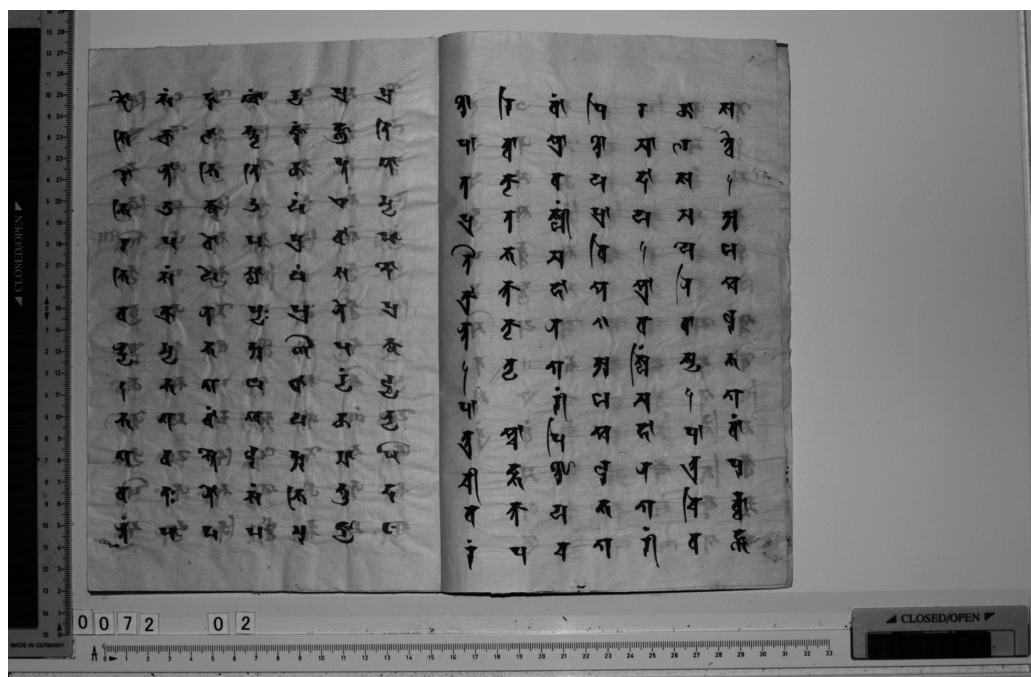
(2)② vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram (0072) について



資料 1

先の『金剛般若經 梵文 上』『金剛般若經 梵文 下』と同じ形式で、1冊にしている。題目は梵字で vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram となっている。 (資料 2)

Max Müller 博士の許には英国の外交官 A. Satow 氏より、高貴寺の住職の<sup>くれとかいしん</sup>伎人戒心師 (1839-1920) が、手書きした梵字だけで書かれた『金剛般若經』が届いたとされる。『密教大辞典』では、「(明治)十三年十月梵学津梁の本詮全部を寫して、英國公使館詰大書記官アーネストサトウ氏に贈る<sup>(5)</sup>。」しかし「A. Satow 氏に本詮を全て写して贈ったとされている。」という記載にも疑問があるが。梵字のみの『金剛般若經』に相当する①金剛般若經 梵文 上下 (0070) (0071) または② vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram (0072) の複写本が送られ



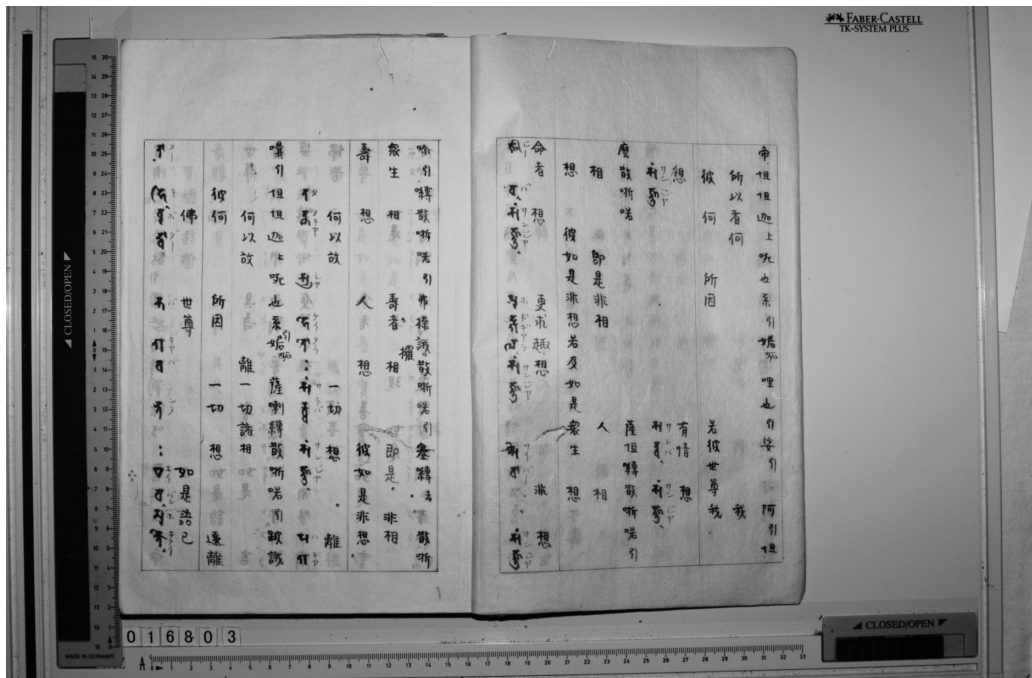
資料 2

た可能性がある。ただし、南條文雄の『懷舊録』では「明治十三年一月以後、マ博士は私達の為に無量寿經の梵本と、前年十月日本から到着した阿弥陀經と金剛般若經の梵文とを購読せられたのである。」<sup>(6)</sup>と書かれている。梵文『金剛般若經』を手に入れたのは、明治12年10月である。梵文『金剛般若經』の写本は、2本がMax Müller博士の許に送られた。2本とは伎人戒心師の書写と金松空賢師の書写したものである。『懷舊録』の文面ではどちらの写本が、届いたかは明らかではない。

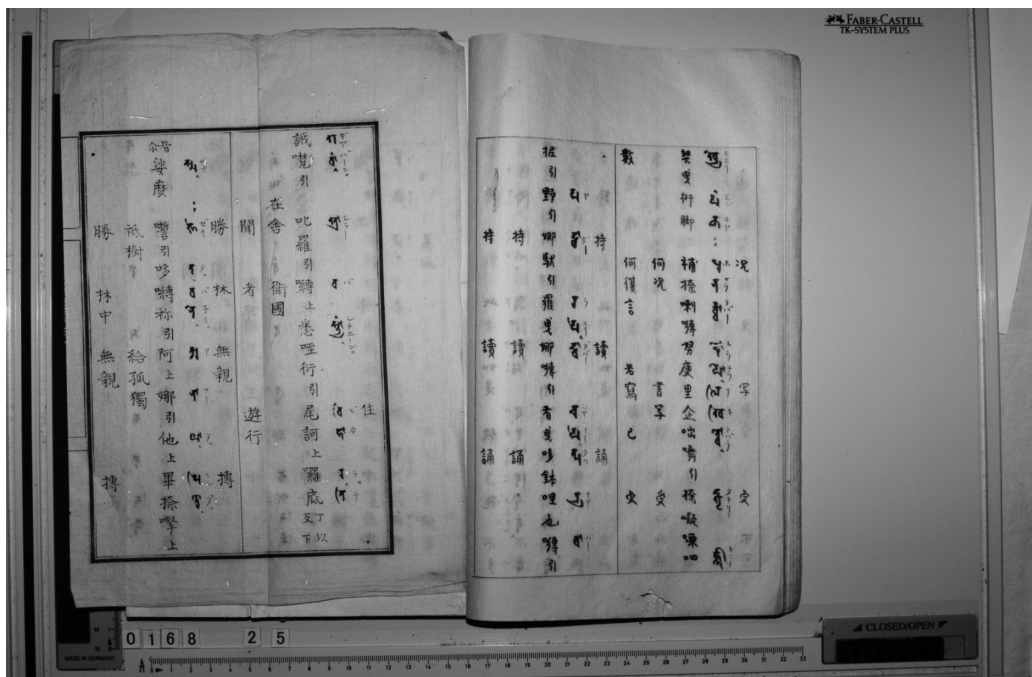
### (3)⑧梵文金剛般若經諸譯互證 四 (0168) について

この写本は『梵文金剛般若經諸譯互證 四』で第四卷となっているが、⑦『梵文金剛般若經諸譯互證』が三卷の完結となっている。⑧『梵文金剛般若經諸譯互證 四』は折り本形式で表紙には、「坤 二稿 梵文金剛般若經諸譯互證 四」と書いている。⑦『梵文金剛般若經諸譯互證』に準じた方法で(1)漢字での梵語に対する単語の訳(2)カタカナで発音のふりがな付きの梵字(3)音写漢字(4)漢訳 羅什訳(5)漢訳 笈多訳を並べている。梵文は第14章(羅什訳では「離相寂滅分」)の途中から始まっている。「坤 二稿」となっているが、「乾坤本」とは始まる箇所が少し違っている。「乾坤本」とは関係なく二冊組の下巻をあらわす意味と思われる。「坤 二稿」から推測するには「乾 一稿」、「坤 一稿」、「乾 二稿」、「坤 二稿」の合計4冊があったと思われる。そのため最後の「坤 二稿」に「四」と書かれた可能性がある。『高貴律寺所蔵慈雲尊者遺芳 總目錄 地』の編集者は、⑦『梵文金剛般若經諸譯互證』と続き番号のために





資料 3



資料 4

「同本 四冊」と記録したと思われる。今回の調査で「坤 二稿 梵文金剛般若經諸譯互證 四」の中から、別の原稿1枚が出てきた。これは、㊦『梵文金剛般若經諸譯互證』の原稿用紙と類

「院紀要」では詮海和尚に関連する写本は乾坤本、甲乙本、上下本の3種類があると発表した。「印佛研」では、「乾坤本、甲乙本、上下本ともほとんど同じ様式である。一丁に梵字が横書きで九列書かれている。梵字の下には漢字の音写文字があり、その下には朱書きの漢字で梵字に対する単語の訳を記している。朱書きで梵字の訂正も行われている。三十二分節の「法界因由分第一」なども朱書きされている。上下本の表紙に朱書きで、「唯如 **bhikṣu** 拝寫 法樹之藏」(bhikṣu は梵字)となっていた。上下本は、梵字の一単語を表わすために梵字の間を朱線で横棒を入れている。乾坤本、甲乙本、上下本のこれらの朱書きは、すべて同じ人の文字である。唯如律師が複写した上下本と同じ手による朱文字である。これからもととは乾坤本、甲乙本に墨字のみで書かれていて、これらの校訂用の朱書きは唯如律師あるいは法樹(智幢)和尚が書き入れた可能性が高い。」<sup>(7)</sup>と発表した。その後の調査で、さきの『慈雲尊者遺芳総目録 地』よれば、「智幢和上加筆」の記載があった。これにより、前回発表した朱書き下人物が、唯如か智幢(法樹)の特定ができなかったが、改めて智幢が朱書きしたと確定できた。また、梵文『阿弥陀経』関係は木版出版などにより刊行し、それらは広く行き渡った。Max Müllerの許には梵学津梁関係の3種類の刊本の梵文『阿弥陀経』が送られているが、梵文『金剛般若経』の場合は、手書き分がMax Müllerに送られた。その理由は、「同本(梵文金剛般若経諸譯互證)四冊 寫本 智幢和上筆 上梓ノ稿本ナリ、但シ未ダ出版セラレズ」との記載より明らかになった。

来迎寺 \      / 乾坤本 (天保八年夏 詮海写) \  
?  
上下本 (唯如写) → 『梵文金剛般若經諸譯互證初稿』 →  
比叡山 /      \ 甲乙本 (天保九年五月 詮海写) /

高貴寺伎人戒心師の梵字のみの写本（英国外交官 A. Satow 氏の仲介） → Max Müller  
 英国人 Wylie 収集の中国伝来の木版本（SKT をランツァ文字で表示）      ↗      ↑  
 北京の大法輪寺所蔵の版本（SKT をランツァ文字で表示、西藏文字で音写西藏語訳付）

## 5. 梵文『金剛般若經』の第1章のローマナイズ対照と分析

本研究は試みとして、ローマナイズの対照と分析を行ってみた。ローマナイズは渡辺章悟著『金剛般若經の梵語資料集成』<sup>(8)</sup>のローマナイズの行数に準じた。他の梵本と対照する時の便宜を図った。音写漢字の略として㊦とする。さきに写本についての再考察で述べたように、朱書きは「智幢和上加筆」と判明したので、朱書き部分はローマナイズには反映しない。ただし、乾坤本、甲乙本の訂正した梵字箇所と梵字は註に書き出している。註番号の①、②などは乾坤本分、註番号1, 2は甲乙本分である。

II Vajracchedikā Prajñāpāramitā II

第1章

Aブロック

(乾) namaḥ sarvva jñaya ||

(甲) namaḥ sarvva jñaya ||

(上) namaḥ sarvva jñaya ||

(初) namaḥ sarvva jñaya ||

(津) namaḥ sarvva jñāya ||

Aブロックでは、まず sarvva と v が重複しているのが見られる。㊦「薩喇嚩」と書かれている。寛政甲寅(寛政6年1794)七月の刊行の梵文『阿彌陀經 義釋』(梵学津梁卷第三百四十二)では、sarva という形で、㊦「薩嚩」となっている。次に jña と jñā の違いがある。最終的には、長音に訂正されている。梵字の jña と jñā は混乱されて書かれていることが、多くみられる。阿満得寿師が「法隆寺貝葉を初めとし、古體には jña の如く、a の長點とも見らるべきものなし、中古より文に jñā の如く、a の引點を見るなり。」(梵字はローマ字に変換)<sup>(9)</sup>と述べている。ただ時代としていつ頃から古体、中古の仕分けがされるかが書かれていない。(乾)(甲)本では字体としては、古体に属する可能性が大である。ただし㊦「嘶嚩」となっており、長音を表す、「引」が書かれていないので jña と考えられる。しかし写本のローマナイズも混乱が生じる。よって本研究は現在使われる梵字参考書に照らし合わせ、梵字に長音表示の無いものは jña で統一していきたい。

Bブロック

(乾) evaṃ mayā srutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ ccharavastyāṃ viharati sma : jetavane

(甲) evaṃ mayā srutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ ccharavastyāṃ viharati sma : jetavane

- (上) evaṃ mayā śrutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ śrāvastyāṃ viharati sma : jetavane  
(初) evaṃ mayā śrutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ śrāvastyāṃ viharati sma : jetavane  
(津) evaṃ mayā śrutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ śrāvastyāṃ viharati sma : jetavane

Bブロックでは、śrāvastyāṃ が (乾) (甲) 本では、ccharavastyāṃ となっているが、正しく訂正されている。梵文『阿弥陀經』でも同じ文章が出てくる。梵文『阿彌陀經 義釋』では、'śrāvastyāṃ viharati sma' を「在室羅筏住處也」と解説している。このことをふまえて校訂していると思う。

#### Cブロック

- (乾) anāśayiṇḍādasyārāme mahatā bhiṣusaṃghghana sārddham ardhattrayodasabhir ①  
(甲) anāśayiṇḍādasyārāme mahatā bhirṣusaṃghghana sārddham mardhatrayodaśabhir 1.  
(上) anāthapiṇḍadasyārāme mahatā bhikṣusaṃghena sāvaṃ mavattrayodaśabhir  
(初) anāthapiṇḍadasyārāme mahatā bhikṣusaṃghena sāvaṃ mavattrayodaśabhir  
(津) anāthapiṇḍadasyārāme mahatā bhikṣusaṃghena sāvaṃ mavattrayodaśabhir

Cブロックでは、'jetavane anāthapiṇḍadasyārāme' に連声が、発生していない。また、'sārddham ardhattrayodasabhir' が、'**sāvaṃ mavattrayodaśabhir**' に校訂されている。ほぼ正しい綴りが、反対に間違って校訂されている。『梵文阿彌陀經諸譯互證 全』(梵学津梁第三百十九卷) 'sāvaṃ mavattrayodaśabhir' でもほぼ同じ綴りででてくる。『阿彌陀經 義釋』によれば、**sāvaṃ mava** を一単語として考え、「與俱也」としている。「唐梵文云 sava 諸也今云 sāvaṃ は者第二転呼也」と書かれている。間違った校訂であるが、この箇所も今までの資料を参考にして校訂している。

#### Dブロック

- (乾) bhiṣuṃsataiḥ ② sabahulaiś va ③ bovisatvairm mahāsatvaiḥ ④ aśa śalu ⑤ bhagavāṃ  
(甲) bhirṣusataiḥ 2. sabahulais va 3. bovisatvairm mahāsatvaiḥ 4. aśa śalu 5. bhagavāṃ  
(上) bhikṣuṣataiḥ sabahulaiś ca bodhisatvairm mahāsatvaiḥ atha khalu bhagavāṃ  
(初) bhikṣuṣataiḥ saṃbahulaiś ca bodhisatvarm mahāsatvaiḥ atha khalu bhagavāṃ  
(津) bhikṣuṣataiḥ saṃbahulaiś ca bodhisatvairm mahāsatvaiḥ atha khalu bhagavāṃ

#### Dブロックについて

aśa や śalu の綴りを atha や khalu に正しく訂正している。続く E ブロックや F ブロックでも綴りの校訂が行われている。



Eブロック

- (乾) purvvāḥṇakāla samayenivāsyāḥ pātracivaram ādāyaḥ śrāśasthiṃ<sup>⑥</sup> mahānagarīm piṇḍāya  
(甲) purvvāḥṇakāla samaye nivāsyāḥ pātracivaram ādāyaḥ śrāśasthiṃ<sup>⑥</sup> mahānagarīm piṇḍāya  
(上) purvvāḥṇakāla samaye nivāsyāḥ pātracivaram ādāyaḥ śravasthiṃ mahānagarīm piṇḍāya  
(初) purvvāḥṇakāla samaye nivāsyāḥ pātracivaram ādāyaḥ śravasthiṃ mahānagarīm piṇḍāya  
(津) purvvāḥṇakāla samaye nivāsyāḥ pātracivaram ādāyaḥ śravasthiṃ mahānagarīm piṇḍāya

Fブロック

- (乾) prāvisat aśa śalu<sup>⑦</sup> bhagavāṃ śrāvasthiṃ mahānagarīm piṇḍāya caritvā  
(甲) prāvisat aśa ghalu<sup>⑦</sup> bhagavāṃ śrāvasthiṃ<sup>⑧</sup> mahānagarīm piṇḍāya caritvā  
(上) prāvisat atha khalu bhagavāṃ śrāvasthiṃ mahānagarīm piṇḍāya caritvā  
(初) prāvisat atha khalu bhagavāṃ śrāvasthiṃ mahānagarīm piṇḍāya caritvā  
(津) prāvisat atha khalu bhagavāṃ śrāvasthiṃ mahānagarīm piṇḍāya caritvā

Gブロック

- (乾) kṭabḥaktakṛtya paścādbhaktapiṇḍapātāpratīkrāntaḥ<sup>⑨</sup> pātracivaram pratiśāmya<sup>⑩</sup>  
(甲) kṭabḥaktakṛtya paścādbhaktapiṇḍapātāpratīkrāntaḥ<sup>⑨</sup> pātracivaram pratiśāmya<sup>⑩</sup>  
(上) kṭabḥaktakṛtya paścādbhaktapiṇḍapātāpratīkrāntaḥ pātracivaram pratiśāmya  
(初) kṭabḥaktakṛtya paścādbhaktapiṇḍapātāpratīkrāntaḥ pātracivaram pratiśāmya  
(津) kṭabḥaktakṛtya paścādbhaktapiṇḍapātāpratīkrāntaḥ pātracivaram pratiśāmya

Gブロックについて

ここでは、kṭabḥaktakṛtya の単語での y と ṛ の混乱がみられるが、それを正しく校訂している。

Hブロック

- (乾) pādā prakṣālya nyaṣīdaḥ prajñapta evāsane paryamkam ābhujya ryajum kayam  
(甲) pādo prakṣālya nyaṣīdaḥ prajñapta evāsane paryamkam ābhujya ryajum kayam  
(上) pādo prakṣālya nyaṣīdaḥ prajñapta evāsane paryamkam ābhujyā ryajum kayam prayam  
(初) pādo prakṣālya nyaṣīdaḥ prajñapta evāsane paryamkam ābhujyā ryajum kayam  
(津) pādo prakṣālya nyaṣīdat prajñapta evāsane paryamkam ābhujyā ryajum kayam

Hブロックでは、(上) では prayam という単語が書かれている。この箇所は朱色で、消されている。書いた後、間違えに気がついたようである。nyaṣīdaḥ の半舌音 ṭ が最終的に正しく

nyaṣīdat と校訂されている。㊦「你也使去捺娜半音」と書いてある。独自の研究により校訂した可能性がある。

#### I ブロック

(乾) praṇivāya abhimuknau smṛti upasphāpya : aśa khalu<sup>㊦</sup> saṃpahulā bhikṣavo yena  
 (甲) praṇivāya abhimuvom smṛti upasphāpya : aśa khalu<sup>11</sup> saṃbahulā<sup>12</sup> bhikṣavo yena  
 (上) praṇidhāya abhimuvom smṛti upasphāmya : atha khalu saṃpahulā bhikṣavo yena  
 (初) praṇidhāya abhimukhaṃ smṛti upasphāpya : atha khalu saṃpahulā bhikṣavo yena  
 (津) praṇidhāya abhimukhaṃ smṛti upsthāpya : atha khalu saṃbahulā bhikṣavo yena

abhimuknau を最終的には abhimukhaṃ に校訂している。㊦「阿上鼻上母騫去」となっている。音写漢字を参照して、校訂したと思われる。ただし、Max Müller 博士は pratimukhīm と校訂している。

#### J ブロック

(乾) bhagavāṃs tenopasaṃkrāntā upasaṃkramya bhagavataḥ pādaḥ sirobhir  
 (甲) bhagavāṃs tenopasaṃkrāntā upasaṃkramya bhagavataḥ pādaḥ sirobhir  
 (上) bhagavāṃs tenopasaṃkrāntā upasaṃkramya bhagavataḥ pādaḥ sirobhir  
 (初) bhagavāṃs tenopasaṃkrāntā upasaṃkramya bhagavataḥ pādaḥ sirobhir  
 (津) bhagavāṃs tenopasaṃkrāntā upasaṃkramya bhagavataḥ pādo sirobhir

#### K ブロック

(乾) akibandyaḥ bhagavantam triṣpradakṣaṇīkyatyaekānte nyapīdaḥ  
 (甲) abhibandyaḥ bhagavantam triṣpradakṣaṇīkyatyaekānte nyaśīdaḥ  
 (上) abhivandyaḥ bhagavantam triṣpradakṣaṇīkrtyaekānte nyaśīdaḥ  
 (初) ābhivandyaḥ bhagavantam triṣpradakṣaṇīkrtyaekānte nyaśīdaḥ  
 (津) abhivandyaḥ bhagavantam triṣpradakṣiṇīkrtyaekānte nyaśīdat

K ブロックでは、H ブロックと同様に㊦「你也使去捺娜半音」と書いてあったが、nyaśīdaḥ の半舌音 ṭ が最終的に正しく nyaṣīdat と校訂されている。

(乾) 本に関する註

- ① sa の下に śa と書いている
- ② sa の下に śa と書いている

- ③ sva を消去し śva に訂正
- ④ hā を消去し再び hā に訂正
- ⑤ gha を消去し śa に訂正
- ⑥ sra を消去し śra に訂正
- ⑦ gha を消去し śa に訂正
- ⑧ strā を消去し ścā に訂正
- ⑨ sā を消去し śā に訂正
- ⑩ gha を消去し kha に訂正

(甲) 本に関する註

- 1. sa を消去し śa に訂正
- 2. sa の下に śa と書いている
- 3. sva の上に śva と書いている
- 4. hā を消去し再び hā に訂正
- 5. gha を消去し śa に訂正
- 6. sra を消去し śrā に訂正
- 7. gha の下に śa と書いている
- 8. srā を消去し śrā に訂正
- 9. strā を消去し ścā に訂正
- 10.. sā の下に śā と書いている
- 11. gha を消去し kha に訂正
- 12. pa を消去し ba に訂正

## むすび

今まで未発表であった写本3種類の発表できた。『高貴律寺所蔵 慈雲尊者遺芳 総目録 地』により『印佛研』(2008)に発表した、朱書きした人物が不明であったが法樹(智幢)和尚だと特定できた。『梵文阿弥陀経』関係は何種かは刊行されたが、同目録により『梵文金剛般若経諸譯互證』は、未刊行であったことが確認できた。ローマナイズの比較対照を行うことにより、校訂箇所が明らかになった。校訂は音写漢字や漢訳を使用し、過去に編集した経典を参照し、独自の研究を基にしたことも窺える。なかには間違った校訂もあったが、当時の梵語学の水準は高いと思う。今後は全文のローマナイズを完成して、緻密に調べていきたい。

〔注〕

- (1) 拙稿「高貴寺蔵新出の梵文金剛般若經写本について」pp. 33-42  
拙稿を読まれたスタンフォード大学の Paul Harrison 教授と東洋大学の渡辺章悟教授より有益なご意見をいただきました。両教授には、この場を借り感謝を申し上げます。
- (2) 拙稿「高貴寺蔵新出の梵文金剛般若經写本について (2)」pp. 419-422
- (3) 本註は貝葉を含む梵文資料で、經典等を梵字のみで書かれたものが多い。末註は梵文を分析、解釈したもので梵文に対して漢訳対照を行っている。
- (4) 上山春平「慈雲『梵學津梁』の実像を求めて」のなかで「筆者は長栄寺の上田諦了和上、執筆の日付は昭和5年(1930)十月となっています。」「宝島寺所蔵の寂巖悉曇学資料に関する総合研究』平成12年5月 p. 35
- (5) 『密教大辞典』法蔵館 1983年 p. 204
- (6) 南條文雄『懷舊録』大雄閣 1927年 p. 153
- (7) 拙稿「高貴寺蔵新出の梵文金剛般若經写本について (2)」pp. 421-422
- (8) 渡辺章悟『金剛般若經の梵語資料集成』山喜房 2009
- (9) 阿満得寿『悉曇阿弥陀經』丙午出版社 明治41年 附言(二) 甲 p. 5

(おくかぜ えいこう 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導：松田 和信 教授)

2009年9月30日受理